



Challenge2013

Title

カンボジア、明日のビジネスパートナーへ

駐カンボジア日本国大使
隈丸 優次さん (61)

※カンボジアで発行されている日本語月刊誌「プノン」
(<http://www.facebook.com/Phnommagazine>) 創刊号 (2013年6月発行) に
掲載された記事です。

「躍動感あふれる街」

—3月に赴任されて4カ月余り。カンボジアの暮らしはいかがですか。

今まで上海、香港、バンコクなどで暮らしてきましたが、カンボジアは初めてです。今まで暮らした都市に比べて、少しゆっくりと落ち着いた生活や仕事になるだろうと思っていましたが、予想したのよりずっと忙しい毎日です。でも、躍動感あふれる街で、楽しく過ごしています。

—フン・セン首相はじめ、カンボジア政府や民間の方と会われて、どんな印象を持たれましたか。

日本に対する信頼、親愛の感情を持ってもらっていることを再確認しました。日本の援助や投資に対する感謝の念も強く示されました。この良好な関係をさらに大きく育てたいと思いました。

カンボジアのみなさんにお会いするなかで強く感じるのは、日本の民間企業に対する高い信頼です。20 数年にわたる日本の復興援助の中で培われたものだとも思いますが、「言ったことはきちんと実行する」ということが、民間企業にも徹底しており、提供されるモノやサービスに対する信用も非常に高いようです。

——2015 年の ASEAN 経済統合をはじめ、東南アジアをめぐる環境は大きく変化しようとしています。カンボジア経済はこれからどのように伸びてゆくとお考えですか。

カンボジアは復興の時代を終え、本格的な経済成長の段階に入りました。これから飛躍的に伸びるためには、今抱える産業構造の脆弱性を克服できるかどうかがかぎになるでしょう。たとえば農業国として、農業製品の付加価値をどう高めていくのか。あるいは縫製業中心の製造業をどう多角化していくのか。その点で、日本企業の果たす役割は極めて大きいと思います。カンボジアにこれまでなかった分野の製造業を持ち込み、技術を移転し、雇用を創出する。日系企業がここで利益を得るだけでなく、カンボジアにとって有用な存在であると思います。

国際社会の声を代弁

——一方で、そうしたカンボジア側の思いにこたえるために、日本政府としては日系企業のカンボジアへの要望をどのように受け止め、伝えていくのでしょうか。

日系企業だけからの要望ではないのですが、ガバナンスの問題が大きいと思います。投資相手としてさまざまな制度の透明化、手続きの迅速化、合理化がまだまだ必要です。また、法治国家として、法に基づいた制度運営や「腐敗」の問題にも真剣に取り組んでほしいです。カンボジア政府から期待され、信頼されている日本と日系企業は、これら国際社会が共通に必要なことを、カンボジア側に代表して伝えることができる。その影響力は重要だと思っています。

たとえばカンボジア政府との間には「日本カンボジア官民合同会議」という会合が年 2 回開かれています。カンボジア側からは投資の受け入れ窓口であるカンボジア開発評議会の事務局長などが出席し、日本側からは議長を務める私

を含む大使館、JICA、JETRO の代表、カンボジアに進出している企業のみなさんが出席し、投資やビジネスをめぐる具体的な課題を話し合います。カンボジア政府が二国間で官民が直接話し合う会議を開くのは、日本だけです。それだけ日系企業は重視されていると思っています。

——カンボジアの経済成長を受けて、日本からの援助方針は変わるのでしょうか。

日本はカンボジアに対し、これからもインフラや経済基盤の整備、教育や保健など社会開発、ガバナンスの 3 つの分野での援助に力を入れていきます。それは変わりません。

ただ経済成長とともに、日本にとってカンボジアの位置づけは大きく変化しています。ODA の対象国というだけでなく、カンボジアは日本の「ビジネスパートナー」になりつつあると言っているでしょう。

近隣アジアとの「逃れようのない関係」

——カンボジアでの援助や投資では、中国の存在感が目立ちます。

中国はそもそも、国外に経済活動を拡大していくという国としての方針を持っています。その中でカンボジアは非常に進出しやすい国であり、他国との競争もそれほど厳しくはない、という点で中国にとって利点があるのだろーと思ひます。

しかしカンボジア側からすると、特定の国との付き合いだけに偏るということは選好しないでしょう。自分の命運を一つのカゴに入れてしまわない、というバランス感覚があると思ひます。カンボジアにとって最良なのは、さまざまな国がカンボジアを舞台に援助や投資を競争することでしょう。中国が展開することを歓迎するものの、だからといって日本の活動を阻むことはありません。お互いにそれぞれの強みを生かして伸びていくこと、それがカンボジアにとっても、日本にとってもいいことではないかと思ひます。

国と国との外交関係にはさまざまな変遷があります。日本と中国との関係でいえば、今は厳しい関係ですが、温かい時代もありました。私は 1970 年代、80 年代、90 年代、2000 年代にそれぞれ中国に勤務し、その変遷を目の当たりにしました。中国は日本にとって重要な隣国です。中国との関係を安定的に発展させていくことは両国にとっても地域全体にとってもとても大切です。もちろん、カンボジアも含むアジアの各国についても、それぞれと逃れようのない深い関係性があります。お互いに長期的な視野を持って国と国との関係を構築していくことが必要だと思ひます。

——日本は、1970年代にカンボジアを支配したポル・ポト政権の元幹部たちの責任を問う「カンボジア特別法廷」に、援助国の中で最も多額の支援をしています。特別法廷は2009年の審理開始以来、長い裁判が続いていますが、その意義をどうぞ覧になりますか。

カンボジア特別法廷は重要な裁判だと思っています。まず、日本も深く関わってきたカンボジアの平和構築の総仕上げであるということ。そして、裁判を通じて正義が実現されれば、カンボジアの社会にあるとされる不処罰の文化を是正していくきっかけになるということ。さらにこの裁判のプロセス自体が、法治国家として重要な学習の場になるということです。日本としては、これからもこの裁判を重視していきたいと考えています。

ただ、裁判は非常に長引いています。審理が終わる前に、さらに重要な被告が亡くなるということも考えられ、裁判関係者には、時間が極めて限られているということ認識して欲しいと思います。そして何より、カンボジアの人たちが、「正義が実現された」と実感できるような裁判にして欲しいと考えています。

——7月28日には、カンボジアの総選挙が実施されます。

内戦が終結してから5回目の総選挙であり、選挙期間が近づいていますが、これまでのところ治安が不安定になるようなことも生じていないのではないかと思います。

選挙内容では、野党の存在感が高まっており、与党一辺倒ではない選挙戦らしい様相を呈してきていると感じます。いずれにしても、民主主義が深まる方向へと進むような結果になって欲しいですね。平和的で自由、公正な選挙を期待します。

隈丸 優次 くままる・ゆうじ

1951年12月7日生まれ。1975年慶應義塾大学経済学部卒業後、外務省入省。在中国日本国大使館参事官（89年）、国連日本政府代表部参事官（94年）、在中国日本国大使館公使（01年）在上海日本国総領事館総領事（05年）、在タイ日本国大使館特命全権公使（08年）、在香港日本国総領事（10年）。福岡県久留米市出身。週末も行事で出かけることが多いが、時間があればゴルフなどスポーツを楽しむ。